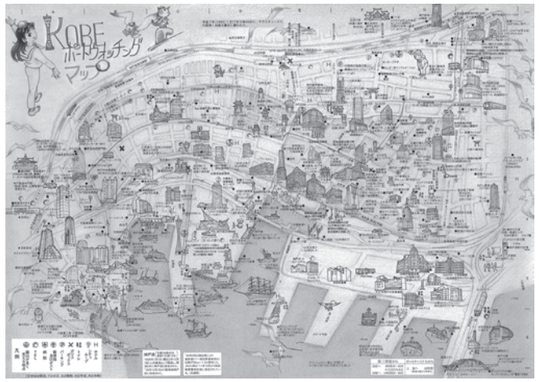
出来事ファイル（№23－1）

神戸元町生誕150年事業準備委員会スタート

神戸元町商店街は、命名された明治７（１８７４）年５月20日を生誕の日としている。創立１３０年には、兵庫県知事・神戸市長など関係者を招き、商店街を挙げてお祝いした。そして今、目の前にやってきた創立１５０年は２０２４年５月２０日。このほど、記念の日をみんなの力で盛り上げるため、いろんな案を出し合う場として、「生誕１５０年事業準備委員会」を設立、スタートさせた。

ポートウォッチングマップ第９版発売

角本 稔さんが主宰する「神戸港を考える会」では、「KOBE ポートウォッチング マップ」を６年ぶりに改訂、発行した。東は三宮のミント神戸（旧神戸新聞会館）から西は湊川神社、山手は生田神社から南は各突堤の南端にいたる中央区内南部全域図を作成した。裏面には、点在する主な建物の竣工年・設計者・由来などを紹介する。旧居留地・南京町については、それぞれ独自に定めたまちづくり方針を解説するほか、博物館や遊覧船などの連絡先もあり、まち歩きに手を添えている。（Ｂ３版八つ折りで1部３００円（税別）。ジュンク堂三宮店、大垣書店神戸ハーバーランドｕｍｉｅ店で販売中。



栄町通クリーン作戦

栄町通まちづくり委員会は、1月13日（金）10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、（元栄海三丁目協和会）奈良山喬一、（㈱イーエスプランニング）久米京子、（神戸市）西尾俊広、（こうべまちづくり会館）木原正剛、（株式会社神明）麻原泰佑、（神明倉庫㈱）藤尾憲弘・大西登紀子、（兵庫県信用組合）遠藤和馬・藤本吉英、（広島銀行）曽我部真介、（三鈴マシナリー㈱）稲岡千硯、（みなと元町サポート隊）諌山一彦、（新光明飾㈱）中川俊・藤田直之・西村友博・大森貴美子、（佐田野不動産㈱）佐田野宏之以上、１７名のみなさんでした。毎月第２金曜日午前１０時、栄町通６丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。

■もとまちハーバークリーン作戦

もとまちハーバー懇談会では1月11日（水）正午12時から、地域一帯のクリーン作戦を実施した。奈良山会長、エスタシオン・デ・神戸から10名、ベルコから5名の方々の参加がありました。

エスタシオン・デ・神戸のみなさん

㈱ベルコのみなさん

□読者プレゼント

観覧ご希望の方は、展覧会名と住所・氏名・年齢・本紙へのひと言を添え、本紙編集部までハガキでお申込み下さい。先着順で２名の方にペア招待券をお送りします。

◎第９回 日展 神戸展

日本最大の総合美術展、日本美術展覧会「日展」が、今年は神戸の芸術都市―六甲アイランドで開催されます。「日展」神戸展では、全国を巡回する基本作品と、兵庫、大阪、奈良、和歌山―地元作家の入選作品、総数約540点を一堂に展観します。
会場：神戸ゆかりの美術館・
　　神戸ファッション美術館
期間：2月18日（土）～3月26日（日）
電話：０７８－８５８－１５２０

◎特別展「知の大冒険―東洋文庫 名品の煌めき―」作品

東洋文庫が有する蔵書約１００万冊の中から、国宝、重要文化財をはじめとする貴重な所蔵品約１２０点を展示します。教科書で見たことがある書物や地図、絵画のほか、あまり知られていない文字や言語、服装、動植物など、まだ見ぬ新たな「知」との出会いが待つ東洋世界への冒険をご堪能ください。
会場：京都文化博物館
期間：2月21日（火）～4月9日（日）
電話：０７５－２２２－０８８８

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト
『日本動物誌』1833-50年ライデン刊
公益財団法人東洋文庫蔵　※会期中にページ替えを行います

神戸元町商店街 楽市楽座情報 2月

◇こうべまちづくり会館ギャラリー（無料）TEL361－4523

2月17日（金）～2月19日（日）　総合学園ヒューマンアカデミー神戸校デザインカレッジ進級卒業制作展（展示は2月18日、19日）
2月23日（木）～2月28日（火）山本寿美子水彩画展

◇元町映画館（有料）TEL366－2636

1月28日（土）～2月17日（金）『チョコレートな人々』
2月　4日（土）～2月17日（金）『餓鬼が笑う』・「クロード・ミレール映画祭」
2月　4日（土）～2月10日（金）『殺しを呼ぶ卵』
2月11日（土）～2月17日（金）『背 吉増剛造×空間現代』
2月18日（土）～3月　3日（金）『猫たちのアパートメント』・『子猫をお願い』
2月18日（土）～2月24日（金）『火光（かぎろい）』
2月25日（土）～3月　3日（金）『光復』
【予定は変更になる場合がございます。】

みなと元町 TOWN NEWS タウンニュース
発　行：みなと元町タウン協議会　住　所：〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内　発行人：奈良山喬一　編集人：岩田照彦　電話・FAX：078－391－0831

JR神戸駅・ハーバーロード周辺まちづくり構想素案・アンケート結果

合資会社ゼンクリエイト　根津　昌彦

タウンニュース2022年12月号でご案内した「JR神戸駅・ハーバーロード周辺のまちづくり構想素案」に対するアンケート調査集計結果がまとまりましたので、本紙にてご報告いたします。

昨年11月末にハーバーロード・ワーキングメンバーが手分けして、今回のまちづくり構想策定の対象エリアでお住まいの方・お勤めの方にポスティングによりまちづくり構想素案冊子とアンケート調査票を配布。分譲マンションにお住いの方々向けには管理組合ポストへの投函と共に、マンション内掲示板での周知をお願いいたしました。また、みなと元町タウン協議会会員の方には郵送等で周知をさせていただきました。

総配布数725に対して、アンケートの返送・回答のあった総数は95件、回収率は13.1％と、私たちの予想を大きく上回る結果でした。また、回答方法の内訳をみると、アンケート調査票に直接記入いただきご回答いただいた方が48件あったのに対し、Googleフォームというインターネット上で回答いただけるサービスを併用したところ、同サービスを利用した回答数が47件と、ほぼ同数のご回答を得ることができました。インターネットによる回答の利点として、①電車での移動時間中を利用してスマホで手軽に回答できる、②自由記述をパソコンのキーボード入力によって回答できるので思いを伝えるハードルが下がる、といったことが想定できましたが、今回の結果は、まさにこの利点が如実に表れたのではないかと思われ、回収率アップにもつながったものと考えています。

95件の回答結果についてみていくと、今回ご回答いただいた方々の年代を伺った問いでは、10代から80代を超える方まで幅広くご回答いただけたほか、50代と60代の方々が回答者の半数を占めていたことから、特にこの年代の方に強く関心を持っていただけたことがわかりました（図1）。

また、みなと元町タウン協議会の存在をご存じかどうかお尋ねした設問では、約半数となる46人の方が知っていたと回答いただき、半数強の方が今回のまちづくり構想素案のポスティングを通じて、私たちの活動を知っていただく機会になったことがわかりました（図2）。これだけでも今回のアンケート調査を実施した価値があったように感じています。

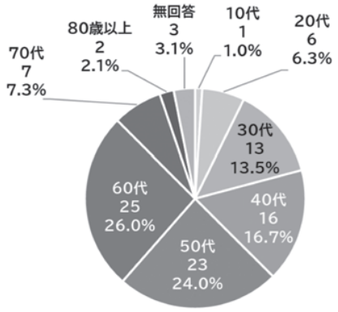


図1. 回答者の年齢

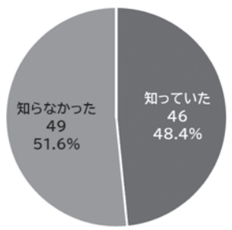


図2. タウン協議会の認知度

まちづくり構想素案で取りまとめた内容に対して、ご賛同いただけるかどうかを尋ねた問いでは、「全面的に賛同する」「おおむね賛同する」をお選びいただいた方が合わせて86件（90.6％）に上り、多くの方の支持を得る結果となりました（図3）。一方で、「一部賛同しかねる」と回答いただいた方も7件（7.4％）ありましたが、その理由などを拝見すると、構想策定エリア内の時間貸し駐車場の確保や西元町駅自体の再整備案の提示を求める声があったほか、きらら広場の再整備方針あるいは全体的な再整備方針に対して、具体的な提案・意見をいただいたというものでした。

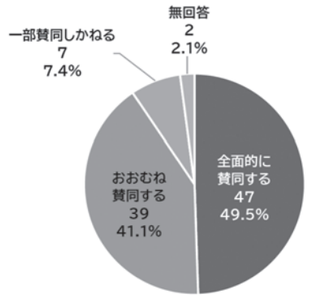


図3. まちづくり構想素案への賛同について

今後2月～3月にかけて、最終構想案とりまとめのための協議をタウン協内で行っていくほか、来る3月16日（木）午後7時～8時を候補日時として、今回のアンケート結果の報告会並びに今後のまちづくりに関する意見交換会開催を、こうべまちづくり会館2階ホールにて計画しています。2月10日（金）のもとまちハーバー懇談会で開催日時を最終決定する予定ですので、開催ご案内については、タウンニュース3月号にてあらためてお知らせいたします。

この度のアンケート調査にご回答いただきました皆様、ご協力誠にありがとうございました。今後ともまちづくり活動へのご理解ご協力の程、よろしくお願いいたします。

海という名の本屋が消えた（111）

平野義昌

西村旅館（3）

1882（明治15）年発行の商店・事業所名鑑に「西村旅館」の絵（写真）が掲載されている。三代目当主・西村貫一が解説する。

〈丸ニ花屋号ト蒸気船問屋ノ看板、格子戸エ当時ノ優秀船ノ看板〉註1

旅館建物は洋館と和館、その間の戸が客用玄関。和館の座敷で番頭が帳簿を付けている。表通りを洋装の紳士淑女、人力車、荷車、棒手振りの行商人が行き交う。裏通りから港が見える。赤青の船旗、汽笛の響き、船が着くたびにいなせな男たちが荷物を運び込む。貫一幼少時、荷物の山に登ったり、かくれんぼをしたり。思い出が蘇り夢見心地。

1931（昭和6）年貫一はゴルフ大衆化を目指し、旅館の一部を取り壊してベビーゴルフ場を開いたのだが、「見事に失敗」した。註2

同年を以て西村夫妻はゴルフプレイをきっぱり辞めた（貫一は文献研究を継続）。旅館経営立て直しのためだ。世の中は不況の真っ只中。『年譜』同年1月に「失業者激増ス」の記述がある。7月16日付け「神戸新聞」は、内務省発表4月失業者数39万人超、5月40万人超、調査開始以来最多、と報道。連日紙面に企業・官庁の減棒、人員整理、争議の文字が並ぶ。9月「満洲事変」勃発。10月31日付け同紙には「一流旅館に整理の噂　古い歴史も不況に勝てぬ　オリエンタルホテル」の記事（補註1）。「西村」も他人事ではない。後年貫一は「うまく切り抜けたものだ」と回顧している。

〈本年は貫一個人にとっても実に危機一髪重大局面でありました。（中略）先祖の土地も家も家業も売って金にして遊んで暮らそうかと一方には考が進みつつありましたが、然し一方には自力で働かざる者は今後は生活が出来難い時代が来ている、扨二つの道のいづれに進もうか。〉註1

貫一は旅館を売ることも考えていた。別邸に住み、経営は従業員任せ、旅館に顔を出すのは月末の集金くらい。毎日ゴルフ三昧だった。旅館を壊し、家財道具を売り払い、ゴルフ場を開設した。「西村」は廃業、と言われた。

〈家業の宿屋だ。先祖代々の宿屋こそ自分が社会と共に生きる道だとゴルフ倶楽部も全部退会して家業に専心全力を注ぎ込み始めた記念すべき年でありました。〉註1

32（昭和7）年「西村」改築。部屋にガラス障子、ガスストーブを設置。満洲の新聞に「大改築保温設備完成、一泊三円より」の広告を出した。不況は深刻、満洲の団体客を一泊2円70銭で受け入れた。

〈客の無いのに硝子障子を毎日毎日セッセセッセと拭いたり、便所の掃除、お客の下駄や靴並べ幾度と無くもう廃業仕様と思ったが、心構の出来ていない亭主とお上さんの気持に自分ながら同情したものです。〉註1

33（昭和8）年2月「西村」は茶代を廃止する。お客到着時に出す茶と菓子に代金を請求する習慣だった。同年10月「栄町ベビーゴルフ場」を閉鎖し、新たにゴルフ練習場にしてプロ選手に無料開放した。11月宿泊料一泊二食五円に改定。

34（昭和9）年4月、「直木三十五追悼講演会」（改造社主催）のため久米正雄（1891〜1952年、夏目漱石門下）、三上於菟吉（おときち、1891〜1944年、代表作「雪之丞変化」）、横光利一（1897〜1947年、川端康成らと新感覚派と言われる）、杉山平助（1895〜1946年、文芸評論家）宿泊、揮毫。同月大阪「花屋旅館」破綻（西村絹創業、妹・久夫婦が継承）。同月東京三越「ゴルフ展」に貫一所蔵資料を出品。11月「文藝春秋」の読書趣味座談会で貫一のゴルフ文献蒐集に言及あり。出席者は折口信夫（しのぶ、1887〜1953年、民俗学者、「釈迢空」名で歌人）、辰野隆（ゆたか、1888〜1964年、フランス文学者）、長谷川如是閑（にょぜかん、1875〜1969年、ジャーナリスト）。

〈長谷川　神戸の西村と云う大きな宿屋がありますが、美文も書く、日本のゴルフ史と云うのがあります。記録を集めたのです。初期から集めたのです。（後略）〉註1

35（昭和10）年貫一は業界紙「旅館新聞」に寄稿、「趣味か商売か　客を喜ばす縦横談」。自分は趣味・商売どっちつかずだったが、商売に専念して2年経ち「知らぬ間に趣味で毎日働いている事を知った」。茶代を廃止しても土産代といって支払うお客がたくさんいて、これも主の腕。設備を立派にすることも大事だが、何よりも「心」を入れて接すること。「之れなら片田舎の旅館の主人も入費入らずの手間入らず、皆が持ち合せの設備です」。部屋代・土産代を頂戴したうえ、一流文化人の揮毫を床の間の掛け物にでき、聴講も無料。「此れも計算に入れると宿屋はボロい」。註1

36（昭和11）年4月玄関を洋式にするなど改築。12月英文・和文の宣伝パンフレット作成、簡単な英和単語対照表やゴルフ場案内も記載。内外の旅行会社、過去のお客に発送した。貫一は雑誌・新聞にゴルフ研究発表を継続。

37（昭和12）年1月「朝日新聞」が「西村」の城郭風の内装を外国人に評判、と紹介。

同年2月「旅館新聞」に外国人サービスについて執筆。貫一の「腕自慢」である。40（昭和15）年の東京オリンピック（戦争のため38年開催辞退）を前に日本の代表的ホテルは部屋数を倍増する計画。「西村」もホテル協会に加盟して一緒に宣伝したいが、ベッド設置が必須。「西村」は純日本式旅館だが、「多数の外人を御泊めして殆んど全部満足させています」。宿泊客が「西村」紹介者に宛てた手紙や直接「西村」に届いた礼状がその証拠。フランスの外交官から結婚式の案内状まで来た。洋式に改造せずとも外国人を満足させることはできる、と先述のパンフレットを講釈する。

〈……ホテルとあれども日本の宿屋で御座いますぞ。小泉八雲（英人）、ピエル・ロチ（仏人）、モラエス（ポルトガル人）等の諸文豪が日本独特の桜、提灯、下駄、生花、歌舞伎、能、茶道に陶酔しているのにあんた方は如何にや。西村旅館に泊って此れ等を味わう好機を失し給うな。日本式旅館で然も英語が通じますぞ。単純！！　単純こそ日本の以上の諸芸術、即ち建築、絵画、文学、茶道、能、その他を知る唯一の鍵ですぞよ。（後略）〉註1

料金は部屋代3〜10円、朝食1〜1円50銭、名物スキ焼は2円、心付け1割頂戴。

玄関で靴からスリッパに履き替えてもらう。ここで日本人は清潔好きという会話を始められる。外国人はスリッパ履きでの階段上り下りが不慣れだから注意。部屋は鍵なしでも安全・安心。部屋は食堂であり、寝室であり、住まい、どう変化するか詳しく説明せず見てもらう。西洋人は背が高いので布団にも注意。彼らの多くは上半身を持ち上げて寝る習慣だから、枕は柔らかいものを一人に二つ用意。冬はアンカ・湯たんぽが喜ばれる。便所は日本に来た以上は日本式を経験してもらう。直接肌を便器につけないので清潔。

〈当館の今日迄の経験では全部といってよい程日本式のを御好みになっています。〉註1

部屋の英和単語集を使ってもらい、宿の亭主の顔面がどう変化するか、それを見るのも旅の思い出になる。急用の場合は「旦那、奥さん、お嬢さん」を呼べ、英語堪能。接客係が間違えて、慌てる、騒ぐ、それも一興。

風呂ではバスボーイ（三助）が背中流し・マッサージ。驚くなかれ、三助・竹さんのサービスは西洋のご婦人方に喜ばれ、彼は多額のチップをいただく。旅行業界の人たちはこれを信用しない。ただ東洋人女性にこのサービスを受けてもらうことは難しい。

〈外人を外人として扱うのですか？　人間として扱いなはれ。人間の人情、心の琴に大した異はないと思います。真心ですよ。（略、トラブルはないか？）日本旅館に泊ってねんやおまへんか。だから最初に国籍を超越して日本を味えと断ってありまっしゃないか。然しとまれ亭主が充分外国語を話すと云う条件がないと一寸無理と云うもの。〉註1

長女・春子が補足説明。三助サービスを拒否する女性に貫一の説得は、東洋人こそ肌を見せない、イヴニングドレスは半分裸、欧州では男女混浴と、外国の浴場史の本を見せる。これだけ言って竹さんを風呂場に行かせ、貫一は旅行会社の幹部に電報を打つ。外国人女性入浴、（三助サービスを）見に来い。註3

38（昭和13）年2月「朝日新聞」で小畔四郎（こあぜ、船会社役員）が貫一について語る。勝手放題でよく宿屋商売が出来たものだが、人一倍親切気があり人使い上手、誤解されやすいのが欠点、美術鑑賞眼非凡、サイノロジー（引用者註、愛妻ノロケ）の親玉。註1

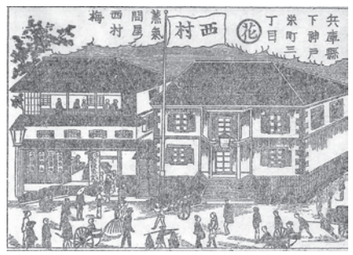
同年3月「毎日新聞」に貫一インタビュー記事。宿屋には多様な人が出入りし、珍しい話を聞かせてもらえる、外国人には日本の歴史・美術・習慣を納得いくまで説明し、時には京都や奈良に案内する。

〈人間と人間とがブツかって、互いにありのままを披露し行かねば駄目です、金儲けの対象だなど思ったらもうしまいですよ。〉註1

不遇な芸術家や学者の世話も気まぐれではなく、創業者の思いを継いでのこと。

〈神戸という土地に愛着を持つ者の任務だといつも思っています。〉註1

註1　西村貫一『西村旅館年譜』　自費出版　1980年
註2　井上勝純『日本ゴルフ全集7　人物評伝編』　三集出版　1991年
註3　へちまクラブ・山本吉之助編・刊行『へちまと十年』1956年
補註1　満洲事変、大恐慌により海外の観光客・ビジネスマン激減。「当社創立以来初めて最悪の経営危機」だったが、翌年財政積極政策によって急速に回復。「事態は漸次良好」。『オリエンタル三十年の歩み』（オリエンタルホテル編・発行、1956年）
写真　『豪商神兵　湊の魁』（1882年垣貫與祐編輯・出版を1975年神戸史学会復刻）より。
引用文は適宜新字・新かなにし、句読点を施した。



みなと MOTOMACHI ケンチクさんぽ vol.18

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部
兵庫地域会　地域まちづくり委員会

生活文化がつくる色

月に一度、会議でこうべまちづくり会館を訪れる。JR元町駅から、道すがら神戸元町商店街をぶらぶら、神戸風月堂、元町映画館を横目に、時に店先にマスクを置く店や輸入食材店に吸い込まれる。時間に余裕のある時は、まちづくり会館を少し通り過ぎた先、元町５丁目にある「みなせ筆本舗」へ、筆・墨・硯・紙などの文房四宝を探しに訪れる。

書を始めてから知ったことだが、兵庫県は全国屈指の書道王国と言われ、書道会、書道人口が多く、非常に書が盛んな地域である。

みなせ筆本舗は幅広い品ぞろえで兵庫の書道家、書に親しむ人、学童を下支えする老舗。隣接する貸し画廊は展示や書の勉強の場にもなっている。歴史は古く、1558年有馬で実用の筆造りを始め、その筆造りの技術力や工程は「有馬筆」として1982年に兵庫県重要無形文化財に認定され、元町商店街に店舗を構えてからは60年以上になる。

程近く、元町商店街から一本南に下ると、しっとりと佇む走水神社がある。街中にあるこの神社は天照大神・応神天皇・菅原道真を主祭神とし、1100年以上の歴史があるという。天神様、学問の神として崇められる菅原道真は、書の三聖（菅原道真・空海・小野道風）の一人で、書の達人でもある。小さな神社だが、社殿脇には存在感の大きな筆塚があり、祈りと共に、役目を終えた筆たちの供養の場ともなっている。

走水神社が筆の老舗をこの場所に引き寄せたのだろうか？と勝手に想像が膨らむ。

神戸元町商店街周辺には、創業100年を超える老舗が20程あるという。それぞれの老舗には、時間を経て紡ぎ出されてきたそれぞれの物語がある。それは、店の個性であり、街の個性、一つの色でもある。

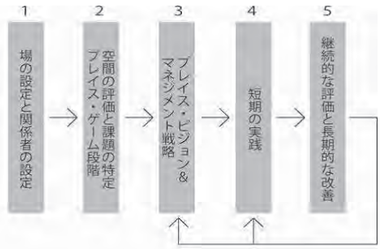
通りを歩いていると、辻々で見える六甲山、感じられる海の気配。時に山風、時に海風の湿り気と匂いは場所性を感じさせてくれる。それぞれの場所では、場の特徴を生かした魅力を発信する取り組みも行われている。私が拠点の一つを置く六甲山では、六甲山の自然を楽しみながら、各施設を舞台に展示される現代アートをめぐる「六甲ミーツ・アート芸術散歩」が2010年から毎年開催、13回目を迎え六甲山の特徴あるアートイベントに成長してきている。2017年からは時期を重ねて「六甲山名建築探訪ツアー」も開催され、自然とともにアートや建築に親しむものとなっている。ただ、六甲山に住む人口は少ないので、参加者は観光客が主だろうか。

みなと元町はどうだろう。阪神淡路大震災の３年後、1998年に「神戸元町ミュージックウィーク」を、音楽好きの神戸元町商店街店主有志で始められている。2022年には３年ぶりに23回目が、丸太やギャラリー・こうべまちづくり会館・一帯のホールやストリートなど複数の場所で、神戸ジャズストリートと時期を重ね開催された。20年以上続けるということは大変なことだが、それだけ地域への思いが強く、魅力があるということだろう。

「街がステージ、みんなでコンサート」を合言葉にした、地元の市民による市民のための手作り音楽祭は、元町の文化的魅力を地域ぐるみで作り上げ発信する手法として、KOBE ART AWARD2014 地域賞を受賞されている。他にも様々な取り組みがあり、地域を愛し地域に携わるみんなの、場に根付いた生活文化の力がそこにはある。これまで連載された「みなと MOTOMACHI ケンチクさんぽ」を振り返ってみても、異国情緒を醸し出す南京町、多様で複雑な古ビルが魅力の乙仲通り、専門店と新しい店が共演する神戸元町商店街、みなと元町エリアの中でもそれぞれの場の個性があり、そこで働き暮らし楽しむ人々の生活文化がその色を作っている。

走水神社（1958再建）脇には存在感のある筆塚

神戸元町ミュージックウィーク2022　ストリート風景



図：プレイスメイキングのプロセス

人に寄り添う居場所

Place making という都市デザイン手法がある。1960年代にアメリカで提唱されたもので、地域のコミュニティと共に、パブリックスペースをPlace＝人に寄り添う居場所になるよう作っていく協同型のプロセス・デザインの考え方と手法をいう。それは単に賑わいをつくることを目的にせず、街のコミュニティの中心として交流できる場、交流しなくてもシェア出来る場、一人でも自分らしく居られる場でもある。

日本ではPlace making JAPANが情報を発信し、2014年国土交通省の政策で触れられてからは全国での実証実験が数多く展開されている。子どもから専門家まで誰でも楽しみながら参加できるプレイスゲームを取り入れ、段階（図）を踏みながら居場所を考え見つけ作っていく手法で、その中に次の2つがある。

１.その街中にあるポテンシャルを秘めた場所10箇所を見つける

２.その10の場所から1つずつ、地域と共に、低コスト・低リスクで検証を行い、検証を繰り返す

Place makingは道路・公園・公共施設・学校などの公共空間を対象にしたものだが、これをみなと元町に応用してみてはどうだろう。

公共性をみんなが利用する場、人に寄り添う場と広く捉えれば、公共空間や歴史的建築物だけでなく、街角の店舗の軒先、探索心をそそられる古ビルの一角、街のギャラリー、映画館、公開空地、空き地などが見えてくる。

通りなど小さなエリアで、10の箇所を見つけ、10の検証を繰り返す。みんなで行うまちづくりをロジカルで客観的な手法を取り入れて俯瞰してみると、面白い発見があるかもしれない。

居場所は、エリアだけでなく街の魅力ある要素や記憶に残る風景でも良いかもしれない。例えば、点在するお地蔵様のお祭りを、毎月24日にどこかで行い、年に一度すべてのお地蔵様で提灯を吊るし一緒に地蔵盆を行う。私が子どもの頃の地蔵盆を鮮明に思いだすように、その風景は新しい住人や子どもたちにとっても記憶に残る風景になり、心の居場所になる気がする。

職・住・遊芸空間であるみなと元町は、人々の生活文化がいきづく街。街は南北東西の面的広がりだけでなく、高さ方向に３次元に、時間軸を含むと４次元になる。

街はステージであり、美術館であり、それぞれの個性ある物語を内包する図書館でもある。

生活しながら感動する魅力。生活文化がいきづくみなと元町は、どんな含みある余白、人に寄り添う居場所を内包しているのだろうか。

矢代 恵（やしろめぐみ）
MEG建築設計事務所主宰
一級建築士／インテリアコーディネーター
広島女学院大学／
大阪総合デザイン専門学校
非常勤講師